

ミニシリーズ

研修と普及をつなぐ <その1>

研修ニーズの明確化と普及活動に役立つ研修の実施～シリアにおける事例から

研修活動は、それだけが独立して存在するわけではなく、その内容に関連した業務や活動が引き続き行われることで、その成果の効果的な活用が期待できる。研修活動が、現地のプロジェクトとして実施されている場合、研修とその後の活動 (Action Plan) をつなぐことは比較的容易で、研修内容に沿って活動計画を作成したり、反対に普及活動に合うよう研修内容を設定したりすることも可能である。これに対し、日本で行われる本邦研修などの場合、帰国後の研修員の活動が必ずしも保証されていないこともあるため、研修内容を活かしたつなぎ方が難しい場合が少なくない。このミニシリーズでは、研修をより有意義なものにするために、研修とその後の普及活動を“つなぐ”さまざまな仕組みや工夫について、具体例をもとに紹介していく。

第1回の今回は、現地での研修実施例として、シリアにおける節水灌漑普及プロジェクトを紹介する。このプロジェクトでは、農業用に使われる水を少しでも減らすための節水灌漑の考え方およびその技術の普及を目的とし、研修による灌漑普及員の養成を行った。研修は、灌漑普及員が節水灌漑に関して、農家が直面する問題に対処可能な能力を身につける、目標達成型の「4ステップ研修」とした。第一ステップでは、農家の現状や直面する節水灌漑の問題を把握できるように、農家調査の事例や手法を学んだ。第二ステップでは、節水灌漑施設の設計と施工及び、その運転と保全について基本的事項の研修を行った。第三ステップでは、今後の普及活動に有用な普及教材 (ポスターやパンフレット) の作成を行った。第四ステップでは、研修で習得した知識・技術や普及教材を活かし、普及活動を実践するための、アクションプランを作成し、それを実施した。さらに、これら4ステップ研修のフォローアップ活動として、アクションプランの実施支援を、プロジェクトとして行った。支援アクションプランの内容は、灌漑に関する Field Day、Field Visit、セミナー、移動劇団、ポスター・コンペティションなどであった。その中から優れたものや、優先度の高いものを選択し、灌漑普及員をいくつかのグループに分

け、OJT (On the Job Training) でプロジェクトを実施した。

これまでの研修は、ほとんどが講義中心の座学で行われており、それも長年使われてきた資料を説明するだけであった。また、ほとんどの普及員は現場農家が直面している問題点について一般論的な理解しかないため、特に節水灌漑に関しては、「普及すべき技術や情報がない」、「やり方が分からない」、または「(教える) 自信がない」という状況であった。しかし、本プロジェクトによる実践的な研修により、研修を土台にした具体的で実践的な対処法と経験により、普及活動の実施につなげることができた。また、これまでの各普及活動は、事前の準備もほとんどなく、場当たり的に行われているが多かったが、本プロジェクトの普及活動では、農家のニーズに基づいて目標を定め、計画を立て、入念な打ち合わせや準備を経て実施に移る手続きに変えることで、農家のニーズに応え、なおかつ普及員の能力アップも同時に図ることができた。さらに、参加した農家の理解度評価や、各普及活動の反省会の実施などのさまざまな工夫により、これまでのシリアにおける普及活動とは違った充実した活動になった。こうした研修後の活動により、灌漑普及員としての能力はさらに向上している。

本プロジェクトでは、研修ニーズの把握 研修テーマの選定 普及員研修の実施 研修を受けた普及員による普及活動の実施 農家への普及 (農家の問題点の解決)、というサイクルからなる、研修と普及を関連付けた「目標達成型研修普及方式」を確立することができた。この方式におけるポイント (特長) は、実際に普及現場で必要とされ、使える知識や技術を研修で身につけさせ、それらを活かす「場」や「機会」をフォローアップという形でプロジェクトが提供した、という点である。

今後は、研修活動における「目標達成型研修普及方式」の定着と、他地域への展開が課題である。さらに、本プロジェクトのテーマは灌漑であったが、他の普及テーマでも同じ手法が適用可能であるだろうし、シリア側も「普及は灌漑だけを扱っているのではない」という考え方から、こうした方式を灌漑以外のテーマにも応用していくことが必要と思われる。



灌漑試験場での研修風景



問題分析で農家の問題点検討



普及活動～節水灌漑の紹介



普及活動～農家との検討

ミニシリーズ

研修と普及をつなぐ <その2>

普及ニーズの明確化と普及活動に役立つ研修の実施～JICA 筑波における事例から

国際耕種では、2005 年から集団研修「野菜栽培技術 II」コースを5年間実施し、2010年から集団研修「小農支援野菜栽培技術」コースを担当している。研修事業の活動項目にアクションプランが追加され中核人材育成から人材育成普及型の研修コースに変化するなか、普及指導を効率化するために普及指導活動計画の策定が求められてきている。今回は、こうした最近の動きをふまえ、JICA 筑波で実施している本邦研修と帰国後の研修員の現場を“つなぐ”ためのさまざまな手順や工夫について紹介したい。

研修員は来日前に作成したインセプションレポート(初期計画書)で提起された課題・問題点を念頭に講義で学び、個別実験や共通実験・実習で理論を体得し、実例を見学・研修旅行で確認する。インセプションレポートの段階では不明瞭だった問題の輪郭が問題分析の講義やワークショップ、そして研修指導者との個別面接を経て次第に明確になり、各研修員の個別実験課題が決定する。個別実験がはじまるとフィールドディ、中間発表会、結果検討会を実施してアクションプランへの道標としている。実験・実習の結果は、テクニカルレポート(技術報告書)にまとめ、担当業務改善のためのアクションプラン(活動計画書)を作成する。個別実験の過程で知れた情報・知識や技術、当コースから学んだ事項を反映しているかどうか。そして、帰国後実際に現地で適用可能なものかを念入りに確認しながらアクションプラン案を作成していく。こうした修正を加えることで、帰国直前のアクションプラン案発表では各自の日常業務で実施可能な活動に絞り込まれている。新規導入技術の評価試験などのアクションプラン案では現地に適応した材料や手法で評価するので3年間ほどの再現実験計画が必要である。研修員の業務上の性格から、アクションプラン案が圃場で農家を取り込んだ栽培試験(on farm experiment)になることがおおい。実験計画で重要な「要因とレベル」については、現地の自然環境、資材調達、社会状況などの諸条件を充分考慮して作成しなければいけない。できあがったアクションプラン案は11月の帰国後各研修員の所属組織内において共有されることを目指している。

このように、研修と現場をつなぐ工夫の一環として、研修員自身が職務内で実践できる活動項目を落とし込んだアクションプラン案作成の改善にわれわれは主として取り組

んできた。今年はさらに研修員により深い理解をうながすために、インセプションレポート発表において帰国時にどのような活動をしたいのか披露させ、研修期間中に再確認を仕向けようとおもう。毎週提出させている Weekly evaluation sheet(様式)に研修中に知れた「帰国後の現場に適用・応用できそうな項目」をくわえ、毎月それを取りまとめて各研修員へフィードバックすることで、アクションプランの内容を充実させていきたい。

また、上述のような普及指導活動の計画化の工夫に加えて、フィールドディの活動についてもさらに改善を施したいとおもっている。今までフィールドディは実験の途中経過発表程度のものでしかなかったが、研修員が普及指導に必要な内容や情報を的確かつ効率的に伝達する普及指導手段の演習の場として明確に位置づけたいと考えている。そうすることでより現地での実践の場面を意識した研修になることを期待している。

研修コースにおける作業の流れ

| | トピックス | 時期 | 概要とねらい | |
|--------------|-----------------|-----------|--|---|
| 本邦研修 | インセプションレポートの見直し | 来日～2月下旬 | 活動地域の野菜栽培に関する自然環境・主要野菜・作型・販売等の現状。小規模農家の抱える野菜栽培に関する問題と原因。研修員自身・所属組織の課題。 | |
| | 問題分析と目的分析 | 3月上旬 | インセプションレポートを基にした問題分析と目的分析。中心問題にかかる直接原因とその対応策案。この対応策が研修後半に作成するアクションプランのActivity。日本の有用技術の自国への応用検討。 | |
| | 解決技術の検討 | 3月上旬 | 個別実験課題についての指導者・外部講師など研修関係者の知見の活用。適切な課題の選択。 | |
| | 実験計画作成、実験の実施 | 3月下旬～4月上旬 | 実現可能なアクションプランの技術的裏付けとなる実験課題・目的・材料・手法。発表を基に研修指導者・研修指導員の助言の活用。 | |
| | フィールドディ | 6月下旬 | 選択課題の個別実験の進捗状況を発表し、研修員全員の理解と技術的気付きを促す。 | |
| | 実験結果検討会 | 9月中旬 | 結果から因果関係の理解を研修員全員で検討し情報を共有。帰国後に実験の再評価をおこなう時の材料や手法の検討。 | |
| | 実験結果発表 | 10月上旬 | 内容の理解と帰国後の再実験の際に検討すべき評価指標の確認。 | |
| | 実験レポート作成 | 10月中旬～11月 | アクションプランを支える技術的裏付けとなる内容。 | |
| | アクションプラン | たたき台(案)作成 | 9月下旬 | 自国小規模農家における野菜栽培の課題に対応した日本の有用技術、技術の普及、研修当初に考えた対応策、個別実験や見学等で見出した事項の検討。日常業務で実践可能なもの。 |
| | | たたき台(案)発表 | 10月中旬 | 指導者・外部講師など関係者の活用。具体性の向上。 |
| 本邦アクションプラン発表 | | 10月下旬 | 課題として抽出された問題、技術の現地適応化。実践的で日常業務でできる技術の普及。 | |
| 事後プログラム | ファイナルレポート | 帰国後2ヶ月以内 | アクションプランを所属組織で報告、検討、修正。 | |
| | | 帰国後1年以内 | 修正した計画の調査・研究・実験などによる技術確立の開始。セミナー、ワークショップなどでの情報伝達。 | |
| | | 帰国後3年以内 | 通常業務内での実証試験の結果の分析・考察。技術確立の評価、普及。 | |

普及活動に役立つ研修の実施

本ミニシリーズでは、シリア技術協力プロジェクトと野菜栽培技術研修の事例を通して、研修をより有意義なものにするための、研修とその後の普及活動をつなぐ様々な仕組みや工夫を紹介してきた。3回目の今回は、普及活動に役立つ研修を目的としたワークショップの成果として、野菜栽培技術研修におけるフィールドデイについて紹介する。

野菜栽培技術研修のフィールドデイは、日本の野菜栽培技術をより正確に理解するため、野菜の特徴から適用した技術の要点や実験での結果を栽培圃場で発表し合うプログラムである。このプログラムでは、実験の意図を容易に理解できる必要な内容を的確かつ効果的に伝達することをもう一つの目的としているが、個々の研修員の発表は、研修当初に立てた栽培計画と結果の棒読みにとどまっており、研修指導側はプログラムが十分に出来ていないと感じている。そこで、このフィールドデイを普及活動の演習と位置付け、有意義な研修となるよう試みた。

はじめに、「ある地域の中央試験場で普及に移せる栽培技術が確立され、この技術を各地の普及所を通じて広めるため技術普及会議を開催する」という仮想の場面設定を行い、会議では、試験場の普及担当が各地の普及員に技術の有意性や、最終裨益者の農民に普及する時の要点などについて説明し、参加者が具体的な普及の方法について検討することとした。このなかで、「スイカの整枝栽培技術とバレイショ栽培における栽植密度の決め方について」を具体的な事例とし、試験場の普及担当として、どのような伝達手法を採用するか、発表に使う物の準備やリハーサルについてどの様に進めるかを研修員に議論してもらい、具体的な作業を行うことにした。演習では、研修指導側が研修員に仮想の場面設定についての説明を行ってから、研修員を2グループに分け、それぞれのグループにおいて具体策の検討と発表を行った。各グループのファシリテーターは、研修指導員が担当した。

また、プログラムの支援として、研修初期の4月に野菜栽培における灌漑技術とその普及の講義の中で、シリアに

おける「目標達成型研修普及方式」を紹介した。ここでは、農家のニーズに基づいて目標を定め、計画を立て、入念な打ち合わせや準備を経て実施に移すことや、参加した農家の理解度評価等を含む一連のフローとフィードバックの重要性について説明した。また、栽培実習では、取りあげた技術の特徴をスイカおよびバレイショの生育と共に説明し、収穫までに行った各種調査結果を検討した。更にプログラムの課題説明後、プレゼンテーション手法の講義を行い、情報の内容を的確・効果的に伝達する手法を紹介した。

次に、研修員全員での話し合いを行い、8月初旬に仮想の技術普及会議の演習を行う計画を伝え、対応するイベントについての各国の現状を紹介してもらい、準備作業のヒントを探った。話し合いでは、セントビンセントの研修員からは、デモンストレーションの評価シートを作成し、事後の活動に反映することや、作業の漏れを防ぐためのチェックシート作成などを活動計画に組み込みながらフィールドデイを開催し、技術の普及活動を行っていることが報告された。また、ラオス、ミャンマーの研修員からは、技術の特徴を整理した文書や写真資料を準備し普及活動を行っている旨の報告があった。フィジーの研修員からは、はじめに室内か日陰でポスターや図表を用いて普及技術の説明を行い、圃場でその実際を見せ理解を深めさせていることが報告された。さらにネパールの研修員からは、FFSの手法を実践していることが報告された。また、参加した農民をリラックスさせるための地域の飲み物を用意することや、質疑応答の手法を用いること、または2つの対比で普及技術の有意性を伝えることなどが紹介された。これらの現状のうち、セントビンセントの活動内容は、今回のプログラムに必要な要素を多く含んでいると思われ、詳細を研修員に説明してもらうことで、参加者全員でそれらを共有した。

2回目の会議は、グループ毎に行い、仮想技術普及会議での発表内容と順番、手持ち資料などについて検討し、発表のための材料作りにとりかかった。具体的には、参加者の特徴に応じた分かりやすい図表・写真を用いたポスターの作成、結果を実物でみせるサンプル野菜の収集や、発表後に記入させる評価シート作りなどであった。その後3回目のグループ会議を行い、演習日の準備を進めた。

これまでの指導を通じて、フィールドデイを普及活動に役立つプログラムにするためには互いの知識や知恵を披露する今回のような試みが有効であると感じた。



準備会議



会議資料作り

普及活動に役立つ研修の実施

今回は、本ミニシリーズの最終回として、前号で紹介した「仮想技術普及会議」のロールプレイの様子と、その準備過程で得られた成果などについて述べてみたい。

「仮想技術普及会議」でのロールプレイ

仮想技術普及会議を始める際は、研修の目的と会議の進め方について、まず以下のような説明を研修員に行った。

「この研修では、研修員が2つのグループに分かれ、確立された技術を伝える側と、それを普及する側の役割を交互に演じるロールプレイ手法で発表と質疑応答を行い、普及活動に関する知見を得ることを目的とする。仮想会議の場面設定は、『A県の試験場で普及に移せる技術が確立され、技術普及会議を通じて各地域の普及員に具体的な活動を始めてもらうことになった』という状況である。」

会議は90分の予定で行った。最初のグループの想定普及技術はスイカの整枝法である。発表会場にお茶やお菓子を準備し、発表概要や普及する整枝法を容易に理解させるための図などを載せた資料を配付したうえで、マルチプロジェクターを使って発表を行った。普及活動の中で、紹介する技術の特徴や従来手法との違い、経済的メリットなどの農民から聞かれそうな想定質問については、発表の評価シートに項目を記述することで対応した。いっぽう、2番目のグループは、パレイショの栽植密度を想定普及技術とした。資料を配布せず、発表概要や技術を適用した結果を大きく書き出した模造紙を黒板に貼って発表を行った。このうち、パレイショの栽植密度を変えることで収穫イモの大きさ分布が変わることを色別で表示した図は、一目で良く分かり、発表を聞きながら内容が把握し易いように配慮されていた。

2つのグループの発表は、異なる普及手法を用いて試みられたが、どちらも仮想の場面設定を踏まえ、受け手側の普及員が理解し易いよう伝え方を工夫していた。また、殆どの研修員が実際に普及業務をしているためか、発表者が伝え切れていない情報を引き出し、発表内容を高めようと発表者と普及員の役割をうまく演じ分けることもできていた。

仮想技術普及会議までの準備を通して得られたこと

野菜栽培技術研修では、適正技術の改善・導入についての検証作業は試験研究を通じて行うことを指導しているが、改善された技術普及の活動については、各研修員に委ねているのが現状である。研修員の帰国後、研修指導

側が彼らの自国での業務に直接関与できない状況で、いかに活動してもらおうかが日々の悩みの種であった。そうしたなかで、研修には普及員が多く参加していることから、彼らの知見を生かして普及活動のアイデアを共有することが出来れば、帰国後にも役立つものと考え、小グループによる準備ミーティングとロールプレイを用いた仮想技術普及会議を研修プログラムの一つとして実施を試みた。この研修プログラムを行うにあたり、研修指導側は、プログラムの過程と発表のロールプレイを研修員がイメージできるよう、研修目的と実施手順を研修員に十分理解させる必要があった。幸い、各研修員が同様の普及経験を持っていたことで、スムーズにプログラムの手順を進めることができた。

ミーティングの様子から、グループの人数は5名前後が適当と思われた。既に普及業務に携わっている研修員の知識や経験を引き出し、他の研修員にそれらを共有させるための研修指導側の姿勢としては、聞き役に回ること、

グループミーティングではメンバー全員が話す機会を作り出し、遠慮無く意見を出せるようにすること、初回ミーティングでは研修指導側の都合による時間制限を行わず、お互いに敬意を払って相手の意見を聞かせるようにすること、などが大切であった。また、ミーティングの2回目以降では、自然とグループリーダーが出てきてミーティングの進行を任せられるようになったが、グループの考えが声の大きい人の意見に左右されないよう、研修指導側が背後で話し合いを見守り、合意のとれたものに誘導することも必要であった。また、どのような手法を用いて発表するのかを研修員自身に考えさせ、具体的な準備をさせるためには、多様な経験に基づく臨機応変な判断も必要であると思われた。小グループによるミーティングを採り入れた今回の研修では、話し合いでメンバー同士の考えが分かるとともに、発表資料の準備のなかで、技術表現について理解不足のメンバーに説明したり、遅れている作業を積極的に手伝ったりする姿がみられ、作業チームごとの一体感が生まれた。こうした研修方法は、講義の様に一方的な情報を与える手法に比べ、現場経験のある当研修員を対象としたものに有効であることが示唆された。



資料配布



2番目の発表